通信第六十七号　そのままの救い

　　　誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海にし、のに迷惑して、

　　のに入ることを喜ばず、真証の証に近づくことをしまざることを、恥ずべし、

むべし、と。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　信の巻・聖典２５１頁

　藤解照海先生が「凡夫には恥ずべし、傷むべしがない」と仰せられたと大石先生から

お聞かせいただいたことがあります。懺悔のない報謝には独りよがりがあります。また、

報謝のない懺悔は本願を疑っているから暗く救いがありません。

　最近ふと、「親鸞さまのお名前を意識したのはいつ頃のことだったのかな」と思わさ

れました。中学校の時です。書棚にあった先生の『』の本でした。そこ

には「親鸞は性の問題をごまかさなかった」という趣旨の事が書かれていたので強く印

象に残ったのでした。

当時の本は今ありませんが、単行本が書棚に在りましたので久々に開いてみました。

そこにはによって女犯を犯さなければおれない煩悩のかたまりである自身であるからこそ他力の念仏によって救われることが書かれています。これは私の味わいですが「本願念仏によって妻が、夫が観世音菩薩と無意識的あるいは意識的に転じられていくのではないか」。「それだから夫婦の完成が遂げられていくのではないか」ということです。そして、その道を親鸞様は歩んで下さったご恩を思わされます。親鸞様の有名な夢告の偈文があります。

　「親鸞おまえが前世からの宿縁（宿業）で女犯をおかさなければならないのであるならば、私が美しい女となって妻となり、一生おまえにつかえ、おまえを幸せにしてあげ、臨終にはおまえを導いて、極楽に生れさせよう」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　『歎異抄』野間宏著・ちくま文庫１０３頁

長く私において疑問になっていた禅の「」という公案があります。

　ある老婆が、一人の修行僧を世話して二十年が過ぎた。いつも少女に食事を届けさせていたのだが、あるとき、少女が修行僧に抱きついて誘惑するようにいった。

「さあ、私をどうなさいます」少女はとほほえんだ。

　だが、僧はまったく動揺せずに言った

「枯れた木が冬の岩に立つように、私の心はまったくあつくならない」とあっさり断ったのである。

　この言葉を聞いた老婆は、この僧をえるどころか本気で怒り出した。

「自分は、こんな俗物を二十年間も世話していたのか！」

　そして僧を追い出し、庵もらわしいと焼いてしまったのである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　道樹録　第十二則

　また、この同じ公案をが弟子に問うと、

「自分ならすぐ抱きます」と答えました。そっこく破門になったそうです。

親鸞さまは家庭をもたれました。多くの祖師方は家庭を持たれていません。悪業煩悩の宿業を通さずに道理で越えられる面があります。また、煩悩を断ぜられるという前提があります。家庭があれば煩悩を自力で断じられるという前提が崩れてしまいます。道理が通用しないことや経済の問題も出てきます。その中でいかに道を求め続けて行けるのか苦悩が深まります。戒律から言えば、親鸞さまは破戒僧です。聖徳太子も家庭を持たれました。釈尊もかつては家庭を持たれた経験者です。

清僧ではないの親鸞様が多くの煩悩にまみれ苦悩にあえぐ人々の心のよりどころとなりました。私たちの日常生活は煩悩の雲霧に覆われて悪戦苦闘しています。ちょっとした事件が起こっても泥水に覆われてしまいます。先日も浅ましい心が次々と湧き出るありさまの時、弥勒菩薩の微笑む写真に呼び掛けられました。「あなた偉い、立派な僧ですか。ほら、ちょっと泥を混ぜればこの通りでしょう」とやかにんでおられます。「意地が悪いな、憎たらしいなあ」という煩悩が渦巻く中で「だからこそ、弥陀をたのまされる、救いにあずかれる」とご廻向があり、南無阿弥陀仏と共にみが出ました。泥沼に咲く蓮の華のように、心身の泥沼の中にかすかなる他力の念仏に救うていただきました。

性の問題にからむ事件がいかに多いか。新聞記事に毎日でています。私も男子として同じ体質の煩悩をもっています。人間の意志や努力や理性で抑えてもどこかで不自然なはたらきが出てきます。本願念仏のお陰で、親鸞様のお陰で煩悩を断ぜずして明るい世界に導かれます。

　と信知して

　　本願力に乗ずれば

　　すなわち穢身すてはてて

　　法性常楽証せしむ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　善導和讃

煩悩具足と信知されるとは実は難中の難の世界であります。ただ頭で知る、理解しているということではないのです。信の一字があることは、他力の世界であります。だから明るくなれるのです。

如来さまから見た私は「穢身であり、不真実であり、煩悩の塊の炭である」という事が真実なのです。その事実に抵抗して自分で真実に成ろう、清浄になろう、火になれると夢を見て、勝手に自分で苦しみ悩み空回りし続けて来たのが私でした。さらにそれは生まれる前からの私の流転の歴史であったのです。そのもののための、そのまま救う本願念仏でした。「弥陀タノム」から煩悩のままに如来さまが浄土へ転入して下さり、浄土の方へと引き入れて下さるようになりました。

『歎異抄』の第九章も生きて味わわされます。「仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」

大石先生とお遇いして初期の頃、私は先生に質問しました。「真言宗の経典の中に、〝淫欲是れ仏道〟という言葉があると聞きました。これはどう受けてゆけばよいのですか」

その時のお答えが次の通りでした。

「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞～～～」のお言葉を「親鸞様でも愛欲に沈没されたのだから、われわれが愛欲に迷うのは当り前よ」と受け取るのであれば、それは真宗の教えを自分の都合のいいように解釈して、迷いを勝手に正当化しているのです。

聖人様が「恥ずべし、傷むべし」と申しておられるのは、すでに浄土に往生しておられるから申されるのです。迷いの世界を超断しておられるのです。

　　　聖人様は六十歳をすぎられたころ、関東を去られました。その時、奥様を越後へ帰されました。家庭団欒を楽しむというご生活ではありません。八十数歳で長子の善鸞様を義絶されておられます。

　　　そういうご生活の中で、絶ちがたい愛欲、名利心を凝視されて、「恥ずべし、傷むべし」と仰せられたのです。人間の言葉ではありません。如来のご本願のお声です。同じ言葉でも世を超えておられるお言葉です。終生、罪障の身であると自覚されながら、「罪障功徳の体となる　氷と水のごとくにて　氷多きに水多し　障り多きに徳おおし」（高僧和讃）と、喜んでおられます。

　　　罪が消えるから喜べます。罪にくくられておる時には喜べるものではありません。りもなく迷うていくものを、大悲は常に我を照らし給うゆえに、絶えず懺悔しつつ、絶えず喜べます。

　　　懺悔なき歓喜はありません。歓喜なき懺悔は救いがありません。歓喜も懺悔も、光明に摂取されて、絶対界に出た時にあるので、すべて如来さまからのご廻向です。光明に摂取されたとき、無明を無明と知らなかったことが懺悔となり、それをそれと知らされたことが歓喜となるのです。お念仏の中では、懺悔と歓喜が同居しているのです。～～～～～親鸞さまは「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し・・・・」と。聖道門の教えから申せば、助かり得ない救いからもれた凡夫とは私のことです、と申されながら「恥ずべし、傷むべし」と申されているのです。こういうお言葉は、どこから出るのでしょう。ただの凡夫ならこのように言いません。「凡夫だから当たり前だ」と居直り、威張るだけです。これ以上申す必要はありますまい。

　　　性欲や名利心が悪いと言われるのではありません。それは否定できるものではありません。しかし、それにとらわれて、信心に心が一筋に向わなかったら、仏道に進むことができません。信心に心が向くということはどういうことになるのか。仏様が見られた私というものが、どういう人間なのかを教えてくださるのです。どこを助けてもらいたいのか、その心の出どころは根本に何が動いているのか・・と。

　　　　　　　　　　　　　　　　　「人みな願いに抱かれて」１３３頁・大石法夫著・樹心者

　その時先生にえて頂き、よどんでいた水がサッと流れ出したことをよく覚えています。この

度読み返してみて、深く重要な問題であることを知らされます。二種深信の法は他力でも、救わ

れる方の機（自分の事）が自力になってしまうのです。若き親鸞さまが問いをもたれました。法

然聖人のもとでお念仏の声は高らかであったけれども、何か違和感があり「信心で助かるのか、

念仏を手段として助かるのか」と問われて、多くの同行さん方は念仏で助かるのにられた。

法然聖人、親鸞様、ほか数名の方が信心の座に座られたというといことが「御伝鈔」「御絵伝」に

詳しく描かれています。「信心正因　称名報恩」微妙で重大なことです。自分で自分を見るのと、

如来様から見られた自分とはほんの少しの違いのようで真反対です。「自分がそう見た、とみる

はずのない自分に見させて下さった。自分がそう思うた、と思はずのない自分に思わせて下さっ

た」自分が見たのならお礼は出ません。如来さまが入って見たてまつった、思うやつでない自分

に思わせて頂いたのなら、頭が下がり必然にご恩報謝のお念仏が出て下さいます。「頭を下げる

と頭が下がると大違い」とよく言われるところです。

　さて、法喜さんから岩田さんからラインが届いたと印刷された紙を渡されました。翌朝

読ませて頂いて驚きました。若いのに進むのが早いのです。それは彼女のかかえている難病のお

陰だと思わされました。休職中のため一人部屋で私のユーチューブなどを見て下さっているとの

ことです。リモート法座にも月四回欠かさずにご参加くださっています。掲載の了解を得ました

ので紹介します。

　　こんにちは。一昨日のリモートで、また元気をいただきました。ありがとうございました。

　　その後、また、気付かされて、早くお伝えしたくて　ウズウズして、次回まで町ちきれずラインさせて頂きました。

　　常照さんが仰った「親思うに勝るおやごころ、の親はどっち？」ということが、ずっと頭に残って、深く思いめぐらして、気付かされました。

　　この大自然をつかさどる大きな力から如来してくださって、あらゆる人や環境で私に働きかけてくださって今に至る、如来さまが親でした。

　　色んな役でもって、身体を動かして下さっていた事で、これまでの全てが思い上がりであって、心の頭が下がる対象は如来様だったと気づかされました！

　　この間の「心の頭が下がる」って部分的だったと気づかされましたが、そんな次元ではなかったことに気づかされました。

　　大自然をつかさどる如来さまに頭が下がったら全てに頭がさがり、自分も含め、娑婆が相手では無くなるような気がしました。

　　だけど凡夫なんですよね・・・

　だからそのままに救われるのが有難いところだと感じました。有難うございます。

　　是非、常照さんにも読んで頂けますよう、よろしくお願いいたします。

　　自分で言うのもへんですが、ピュアすぎて、傷付きやすくて、鎧着ちゃって無理してボロボロになるから娑婆世界が辛いんです。

　　これから自分の我を知らしめられていくのですね！

　　障りのない世界を体感したいです。ありがとうございます。

　　　本物の念仏者になります。その為のこれまでだったと思えます。

　　私が生きる目的を示して下さってありがとうございます。なむあみだぶつ

　　私、昔から何かにつけて、繊細で敏感で弱すぎるんです。

　　だから、強く見せようとしたり、人の何倍も努力しなければならないと思い込んでました。

　　　私なりに如来様に助けられ、証明されて、利他へ進んでいきたいです。

　　大阪、遠いですね。

　　ご法話や本、以前の法喜さんに頂いたラインで道人さんのこと伺ってましたが、最近リモートに参加しているのがうれしいです。

後半の告白的文章はまるで私のことが書かれているようでした。先生方やご本願のみ教えによ

って私はいつのまにか変えられて来ました。暗い人生だったのが明るい人生へと導かれて来たのです。今も途上です。ご本願をお伝えすることが生きがいと成らされました。独りよがりでないことを美都璃さんが証明して下さっているようで嬉しいです。ユーチューブがお役に立てていることを知らされやりがいを頂きます。少しづつですが視聴してくださる方が増えてきました。皆さんと共に生長さされています。厚くお礼申し上げます。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

　令和五年九月初旬　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照拝